

西留 いずみ 提出 学位申請論文

『佐賀藩蘭学者の研究』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、近世後期から幕末における佐賀藩蘭学者の知識形成の過程を、島本良順・伊東玄朴・金武良哲の三人を中心に、学問の修得、蘭学塾における医療活動や会読、蔵書の分析、政治情勢や藩政への対応などについて検討し、特に実証的な論証を重ねながら通説を批判し、新たな史実を検証した研究である。従来の佐賀藩における蘭学研究は、幕末の藩政との関連や軍事技術の発展が主流で、蘭学者たち個々の知識形成を論じる研究は少なかった。

本論文は、序論と本論五章、補論二章、および終章となる「おわりに」から構成される。

まず序章に研究の目的と研究史、各章の概要をまとめ、第一章「佐賀藩蘭学者島本良順の学問」では、佐賀藩蘭学興隆の祖とされる島本良順の藩への登用の過程と知識形成を考察し、藩主一門の白石鍋島家の史料などの検討から史実を導き出し、島本の蘭学修行とともに長崎・京都・大坂における事績、佐賀藩蘭学寮での役割などを明らかにし、さらに彼の著作について考察している。本論文の筆者は、彼が医学以上に言語学に優れていたことが、佐賀藩の蘭学発展に貢献したと主張し、かつ島本が藩に対して専門的な知識を自由に披瀝できたのは、藩側の敬意と寛容な態度があり、それが佐賀藩の蘭学発展につながっていくと論じている。

第二章「象先堂開塾前後の伊東玄朴―改名とシーボルト事件を中心に」は、シーボルトに学んだのち江戸で活躍する佐賀藩出身の伊東玄朴について、文政期における動向を考察している。シーボルト事件の前後の佐賀藩と長崎奉行の動静に注目しながら、玄朴が苗字を瀧野姓から伊東姓に替えていく過程を白石鍋島家の史料により考察し、従来の改姓に対する通説を訂正した。その背景に、佐

賀藩が玄朴の蘭学の能力を高く評価し、シーボルト事件に連座しないよう守ろうとしていたためと推察している。

第三章「佐賀藩蘭学者「金武良哲資料」の史料学的研究」は、幕末に佐賀藩蘭学の中心となった金武良哲の蔵書分析が中心である。金武は職人の子から蘭学者に立身したといわれ、蔵書の分析にも、彼の経歴を反映させている。金武の資料は、佐賀県立博物館に寄託されており、筆者はその資料を調査して自ら目録を作成し、金武の蔵書と訳稿を整理分類したうえ、金武の知識形成の特徴を考察している。金武が出自ゆえに漢学を修得せずに蘭学者となったとし、蔵書には漢訳洋書が存在しないことから、蘭書から直接学んだと推論するとともに、理系を中心とした翻訳草稿が多いことに注目して、金武が科学技術の分野で藩に重用されたことを論証している。さらに明治初期、金武は解剖用語を和蘭語・ラテン語・日本語の三言語で著した辞書を出版しており、筆者はここに医学寮で教鞭をとった教育者としての金武の姿勢を見出し、また写本にユーモアあふれる落書きや謎かけなどが散見されることに、金武の人間性や学問を楽

しんでいる姿を垣間見ている。

第四章「天保期における伊東玄朴塾「象先堂」の蘭学修業―佐賀藩蘭学者金武良哲「江戸日記」の分析―」では、天保十年（一八三九）に金武が江戸の象先堂に遊学した際に記録した修業日記を元に、金武の知識形成、初期象先堂の教授方法・治療の実態等を分析し、当時の遊学者の学問修得の姿を考察している。玄朴の蘭学ネットワークを最大限に活用して、金武が修業していたことを日記から考察しており、従来知られていなかった天保期における象先堂の医療活動の実情、教授内容などを具体的に明らかにしている。

第五章「佐賀藩における蘭学寮・医学寮の創設及び変遷の再検討」は、蘭学者の知識形成の拠点となった蘭学寮・医学寮の基礎的な研究である。通説では嘉永四年（一八五一）とされていた蘭学寮の創設を天保十一年に訂正しており、『草場珮川日記』『褒賞録』、『旧藩学校調』などを使用して論証し、関わった蘭学者たちの動向を考察しながら佐賀藩の天保改革に位置づけている。

さらに補論として、研究活動の過程で発見した新史料を紹介するとともに、

佐賀藩蘭学者の藩を超えたネットワーク、蘭書翻訳をめぐる問題について論じている。

補論一「安政期における水銀山再興に関する佐賀藩・平戸藩蘭学者の折衝」は、蘭学者の藩を超えたネットワークと幕末政治との関係を考察する。佐賀藩医の蘭学者大庭雪斎が、平戸藩藩医岡口等傳と平戸領の相神浦水銀山再興について折衝を重ね、佐賀藩・長崎奉行なども関わるという状況を、佐賀県立図書館蔵千住家文書から分析している。

補論二「『増補再版格物致知略説』訳出をめぐる金武良哲と久米邦武」は、『米欧回覧実記』で著名な久米邦武の研究で、従来不明とされていた史料を、筆者が「金武良哲資料」のなかから発見し、その成果をまとめた論稿である。筆者が発見した金武の『増補再版格物致知略説』に、久米邦武が増補訂正を加え『物理学』を著作した。筆者は金武と久米の親しい関係を紹介しながら両者の文章を比較検討し、金武の翻訳と久米の増補を共同作業と捉えるとともに、久米の文章に遣欧使節に加わり『米欧回覧実記』を著作した経験が生きていると論じ

ている。

終章にあたる「おわりに」において、筆者は改めて通説に依拠して史実を確定しない従来の佐賀藩蘭学の研究を批判し、史料の発見と緻密な検討から史実を発見し通説を訂正していったことを確認している。かつ、本論文で検討してきた佐賀藩の蘭学者たち、殊に金武良哲の知識形成について、未知の蘭語を学ぶ困難さに思いを馳せながらも、彼らが新たな知識・思想に知的好奇心をもって、純粹に学問を愉しみながら未来に向かっていく姿を、史料の検討の中から見出したことを明らかにし、さらなる検討を課題としている。

論文審査の結果の要旨

佐賀藩蘭学の研究は従来から多くの研究成果があり、幕末の藩政との関連や軍事技術の発展などについては学界の主導的な立場にあるものの、蘭学者たち個々の知識形成を論じる研究は少なかった。また基礎的な理解として『鍋島直

『正公伝』が多く使用され、その記載に対する検証も必ずしも行われていなかった。本論文の筆者は、近世後期における佐賀藩の蘭学者が、実際に如何に知識形成を行っていたのかを、史料を通じて地道に検証し、併せて佐賀藩の蘭学発展の画期となるさまざまな問題を、史料を博搜して論証しその錯誤を訂正した。

本論文は序論において研究史と本論文の構成を記し、第一章で、佐賀藩蘭学者の祖とされる島本良順の藩への登用の過程と知識形成を論じ、長崎・京都・大坂における蘭学修行や大坂における医学塾の開設、佐賀に帰藩後の登用、さらに島本の蘭学者としての医学・言語学の業績を論じている。島本の藩への登用や長崎・大坂での経歴について、史料の博搜によってその時期と事情を明らかにし、また蘭学寮設置など佐賀藩の蘭学発展の画期と関連付けた点は注目でき、大坂における緒方洪庵らとの交流など、蘭学者のネットワークを推測している叙述も妥当である。特に島本の蘭語の理解と知識が、のちの佐賀藩の蘭学の発展を支えたという論旨も首肯できる。

第二章は、伊東玄朴の伝記の一端についての論考である。伊東玄朴は佐賀藩

領出身でシーボルトに学び、のち幕府の奥医師となって種痘の普及に尽くし、近代医学の発展に寄与した人物である。玄朴が瀧野姓から伊東姓へ改姓した背景について、筆者は、シーボルト事件の捜査の過程で、佐賀藩および一門の白石鍋島家が、長崎奉行と玄朴の処遇につき交渉を重ねていたことを史料から突き止め、佐賀藩が玄朴を守ろうとしていたことが、瀧野から伊東への改姓の背景にあったと推論している。『伊東玄朴伝』などの通説を訂正する内容であり、伊東玄朴や佐賀藩蘭学史の研究にとっても看過できない指摘である。

第三章は、幕末に佐賀藩蘭学を主導した金武良哲の知識形成について、佐賀県立博物館寄託の金武良哲資料を自ら調査して目録を作成し、金武の蔵書と訳稿を整理分類したうえ、金武の知識形成の特徴を考察している。現存する金武の蔵書・翻訳稿二五一点を、医学・兵学・化学・物理学・地理学・天文学・博物学・語学・字書・漢学・和学に整理し、金武の知識形成について、新たな知識を摂取し学問を楽しみながらも、佐賀藩の軍事技術の発展に寄与する姿を描いている。筆者の研究はこの作業で得られた成果を発展させることにより、本

論文に結実したとみることができる。

第四章は、天保十年（一八三九）金武良哲が、江戸の伊東玄朴の象先堂に留学し、玄朴の代理として旗本・商人などを診察しその病状と治療の記録を記し、かつ江戸の蘭学者たちと蘭語の文献を解読した日記を精緻に分析し、金武ら蘭学者の知識形成を生き生きと描いた論稿である。治療の記録は近世後期における蘭方の治療法の特徴を詳細に示しており、蘭書の解読の記事は、蘭学者たちのネットワークと蘭学の学修について様々な事例を提起している。具体的な蘭学者たちの知識形成のあり方を提示する好例といえる。

第五章は、佐賀藩が設置した蘭学寮・医学寮の基礎的な研究である。従来嘉永四年（一八五一）とされていた医学寮の創設を天保十一年と、通説を史料に基づき大幅に訂正したことは、佐賀藩の蘭学発達の研究にとって貴重な成果といえる。ただ、この成果を佐賀藩の蘭学の展開にどのように位置づけるのかは、今後の課題である。

補論となった二編は、何れも筆者が史料調査の過程で見出した新出史料を検

討した論稿である。佐賀藩医大庭雪斎が平戸藩の水銀鉞山の再開発に関わった補論一は、蘭学者の藩を超えたネットワークと幕末政治との関係を考察しており、補論二では、金武良哲の物理学に関する翻訳を、久米邦武が意識増補した書物の検討であり、両者の親しい関係を紹介しながら文章を比較して共同作業と位置付けている。それぞれ興味深い事例であり、史料紹介としては意義があるが、特に補論一はまだ不明な点も多く、補論二はさらに精緻な比較検討が必要といえよう。

最後に筆者は佐賀藩蘭学の研究が、幕末の藩政との関連や軍事技術の発展に重点が置かれ、為政者の側からの蘭学利用が中心となっていることを指摘し、蘭学者たちが蘭学を習得する過程で、知的好奇心を刺激しながら未知なる新しい学問を純粹に楽しんでいる姿に注目しており、政治や支配の動向に捉われないう蘭学者の純粹な知識形成を今後の課題として掲げている。

以上から本論文は、近世後期から幕末における佐賀藩蘭学者の知識形成の過程について、学問の修得、蘭学塾における医療活動や会読、蔵書の分析、政治

情勢や藩政への対応などについて検討し、特に実証的な論証を重ねながら通説を批判し、新たな史実を検証した研究と評価できる。ただし、残された課題も多い。まず筆者の研究成果の第一は、佐賀藩蘭学の展開に関する通説の訂正であり、その過程における蘭学者の対応を論じているが、研究成果を佐賀藩の政治あるいは蘭学の展開にどのように位置づけるのかという指摘が少ない。また蘭学者の知識形成の過程や、蘭書の翻訳、医学書の著作などの検討について、幕末の蘭学界や医学界のなかで、いかなる位置にあったのかという比較検討が、蘭学塾の学則などを除けば希薄といえる。しかしながら以上は今後の課題であり、幕末の諸藩の中で最も蘭学が盛行したとされる佐賀藩の蘭学の展開に新たな史実を提起し、蘭学者の知識形成について新史料を駆使して詳細に検討した本書の成果は、今後の蘭学研究に寄与しうる研究成果と評価できる。

よって本論文の筆者西留いずみは、博士（歴史学）の学位を授与される資格があると認められる。

令和二年十二月二十日

主	副	副
査	査	査
國學院大學教授	國學院大學教授	佐賀大学特命教授
根	吉	青
岸	岡	木
茂	孝	歳
夫		幸
印	印	印

西留 いずみ 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士（歴史学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和二年十二月二十日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	根岸茂夫	印
副査	國學院大學教授	吉岡孝	印
副査	佐賀大学特命教授	青木歳幸	印